

# 牛乗り童子

花巻人形は、江戸時代中期の18世紀初め頃、全国の土人形の源流といわれる京都の伏見人形と仙台の堤人形の流れを汲み、独自に発展した人形です。製作工程は、シンプルでいて繊細。まずは土を練り、表裏一對の木型に詰めて型をとります。それを乾燥させて素焼きにしたら、膠を溶いた胡粉を全体に塗って下地に。その上に顔料や染料を使い彩色を施します。人形の表面だけを彩色し、背面は白い胡粉のままなのが特徴です。また、人形の胴体部分は空洞になっており、そこに小粒の石や砂を入れて、和紙で底に蓋をします。そのため人形を振ると、「カラカラ、サラサラ」と軽い音が響き、幼児をあやすときに使われていたといわれています。

今回紹介する「牛乗り童子」は、禅宗の代表的な画題「十牛図」の一場面をあらわしています。「十牛図」とは、修行者が牛を探し捕えるまでの過程をたとえとして、禅の修行により心境が高まっていく様子を十段階の図に示したものです。この人形は第六図の「騎牛帰家」を表現しているものと思われます。見つけた牛をどうにか捕まえ、飼いならしていくうちに、牛と童子が一心同体となっていることに気がきます。おとなしく休んでいる牛の背中で、童子は楽しそうに笛を吹いています。



花巻市博物館所蔵(高16.0 幅16.0 奥9.6)